

# わがまち歴史散歩

## 中世、池田氏の登場

### ○「池田氏」初出の史料は？

『新修池田市史』第1巻では池中世史の中心人物ともいえる池田氏の歴史的出現について詳しい追求がなされています。

最も重要な発見は、弘安7年(1284)6月8日に勝尾寺の桜本坊領の権利を半分ずつに分割した和与状です(勝尾寺文書)。この和与状は右近将監藤原政長が作成し、その端裏書には「桜本坊領和与状 池田右近尉状」とありました。ここから、池田氏の本姓は藤原氏、それが池田氏の活動の跡を残す文献上の最も古い記録だと明らかにされたのです。

また、こうなると、永仁元年(1293)銘のある神田3丁目常福寺の層塔と、正安元年(1299)銘のある鉢塚3丁目釈迦院の宝篋印塔にそれぞれ彫り込ま



▲釈迦院の宝篋印塔

れた「藤原景正」の名前にも注目すべきだと注意を喚起しています。

ちなみに、藤原景正は、永仁2年(1294)12月14日の多田院への燈油寄進状に政信・宗綱とともに3兄弟の嫡男として名前を残しています。なお、父の名前は沙弥道智とされています(多田神社文書)。

つまり、池田氏の出現は貞治2年(1363)5月2日の「足利義詮御教書案」と同4年(1365)の「春日社領垂水西牧結番目録」(今西家文書)だとされてきた『大阪府史』など従来の通説は再検討されるべきだとしているのです。

### ○地名と人名の区分

ところで、難しいのが史料上に「池田」と出てきた場合に、それが地名を指すのか人名を指すのかの区別です。『新修池田市史』第1巻では、右記の史料に続く池田氏に関する記録としてまず以下の二点の勝尾寺文書を挙げています。

一つ目は、正和4年(1315)

の「常行堂散所田島注文」です。

ここには「池田分」と書いて改行し、「田一反 所当八斗呉庭 作人五郎左衛門尉入道(池田、法名良覚)」とあります。

二つ目は、貞和5年(1349)「鳥居造立条々注文」です。これは勝尾寺の鳥居建立に関する記録ですが、そこには「池田一貫文行阿(太郎兵衛入道)」とあります。

さらに(第三点目となりますが)、近年見つけ出された建武3年(1336)10月5日の平国茂軍忠状(中西八百樹氏所蔵)の中にも「九月三日：国大将より仰せ出でらるの間、池田城に於いて数日を送り、夜詰め等軍節致したんぬ。」との記述もあると指摘されています。

しかし、これらは池田氏の活動を示す史料なのでしょいか。むしろ、池田という地名を指している史料のように思われてなりません。

第一の史料は、「呉庭」と「池田」が重なった地域を指す言葉であることを示しているようです。この土地の作人は五郎左衛門尉

入道で、池田に住み法名良覚というのだと読むべきかと思えます。

第二の史料も池田に住む行阿(太郎兵衛入道)という人物が1貫文の寄付をしたという意味でしょう。

そして、第三の史料はまさしく池田城の存在を示す最初の記録であって、場所は不明確ですが、おそらくは池田氏の拠点とした軍事施設であったと考えられます。

### ○国人池田氏の実態

池田氏はまさに呉庭とも呼ばれ、あるいは、そのうちにあつたと思われる池田とも呼ばれた地域を基盤とし、鎌倉時代後期頃にはその力を伸ばし始めていたのです。まさに国人と呼ばれる土着の豪族でした。

では、その池田氏の力というのはどのようにして形作られていったのでしょうか。知りたくありません。

(市史編纂委員会委員長・小田康徳)  
◆問い合わせは生涯学習推進課市史編纂(☎754・6674)